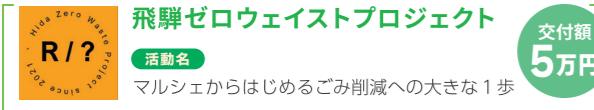


まちスプ飛騨高山 助成金の交付決定

「ここでつながる、ここからはじまる。」という当法人のテーマのもと、社会的課題の解決に取り組んでいる団体、グループ、サークルと地域住民の皆様がつながり、新しい活動をはじめる後押しをするために寄せられた寄付金を原資に、地域住民の皆様の活動を応援するため、2014年度に設置されたまちスプ飛騨高山助成金の制度です。

2021年度は現在4団体がエントリーし助成金の交付が決定しました。



飛騨ゼロウェイストプロジェクト

活動名

マルシェからはじめるごみ削減への大きな1歩

交付額
5万円



NPO法人はみぐアニマル

活動名

企業と取り組む地域社会福祉～SDGsで動物愛護の活動支援～

交付額
5万円

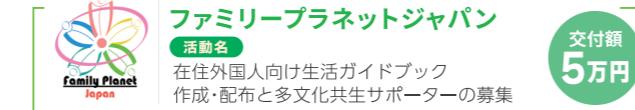


MAP'04実行委員会

活動名

MAP'04の認知向上に向けたチラシ制作事業

交付額
4万円



ファミリープラネットジャパン

活動名

在住外国人向け生活ガイドブック作成・配布と多文化共生サポーターの募集

交付額
5万円

今後も、交付団体の活動取り組みによって地域に広がる笑顔の輪を追っかけレポートしていくので楽しみにしていてください。

詳細はこちら
まちスプホームページから
<http://machispo.org/2021zyoseikinninsakai/>



第3回|スキマ|研究会



まちスプ飛騨高山

今回のスキマ案内人は飛騨ゼロウェイストプロジェクトの佐野愛弓さん、田原なおみさん、河野美紗さん。モディレーターは前回同様に事業パートナーの古里圭史さんが務め、スキマ案内人の取り組み「ゼロウェイストとは？」をテーマに、3人のメンバーが活動に関心を持った経緯や、日々の活動を紹介していただきました。「ウェイスト＝無駄・ゴミ」ゴミをどう処理するかではなくゴミを出さないようにすることが大切だと活動されている飛騨ゼロウェイストプロジェクトの皆さん、「1人の100歩より100人の1歩。」という合言

開催日:2022年1月26日(水)10:00~11:30
会場:オンライン まちスプ飛騨高山
主催:認定NPO法人まちづくりスポット
参加者:16名

葉のもと活動を広げています。

2021年度飛騨高山助成金を使い取り組んだ「第1回飛騨ゼロウェイストマルシェ」についての成果報告では、今までの活動への意気込みも併せてご報告いただきました。「笑顔で楽しみながら活動を続けて行きたい。」と満面の笑みで伝えくださいました。飛騨ゼロウェイストプロジェクトの皆さん。これから活動にも注目です。



総務省のデータ入力の統一ルールがすごく為になる。
中川



乾燥で、ハンドクリームが手放せない。。。
野首



昨年の経験で、雪かきがラク～になった気がします。
板屋

1月のホームページ更新

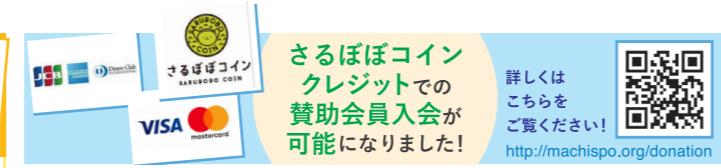
<http://machispo.org>



●飛騨コミュニティ財団(仮称)設立事業
<http://machispo.org/hidakomyu/>

●2022年2月まちスプ飛騨高山 イベント情報
<http://machispo.org/202202event/>

●第3回ひだのスキマ研究会
<http://machispo.org/sukima3/>



さるぼぼコイン
クレジットでの
賛助会員入会が
可能になりました!

詳しくは
こちらを
ご覧ください!
<http://machispo.org/donation>



2022年2月15日発行(通巻96号)

発行:認定NPO法人 まちづくりスポット 発行者:竹内 ゆみ子 編集:五十嵐 浩子
〒506-0025 岐阜県高山市天満町1-5-8 フレスポ飛騨高山内 TEL 0577-62-8550
FAX 0577-62-8580 E-mail: info@machispo.org

事務局休館日:毎週火曜(火曜祝日の場合は水曜日)年末年始

毎月の事業報告!

2022.02.15 February

会報 まちスプ Machispo Vol. 96

新年の抱負は決まったかい?

Since 2012.3.4



10年目を迎えて

まちスプ飛騨高山



認定NPO法人まちづくりスポット 代表理事
大和リース株式会社 取締役常務執行役員 営業本部長

森内 潤一

思い至ったのは2011年の夏頃でした。その後、2012年11月1日に全国136番目のショッピングセンター【フレスポ飛騨高山】オープンと同時にまちスプをオープンしました。当初の思いは大和リースのビジネスとして、『何とか、新しく作る商業施設を活性化したい、地域の人達にもっともっと愛着の持てる施設にできないか』と言う思いで色々な事業を模索していました。そこで出会ったのがNGOを運営されている竹内さんでした。協議を重ね、色々教えて頂きました。その中でも『コミュニティは誰かが育てなければ駄目になるよ』の一言で私はまちスプを設立しようと思い今に至りました。スタートする頃、私は『NPOとは何か』から始めなければなりませんでした。ビジネスマンとして長くゴリゴリやっていた私にはとても難しい事業の開始時期が有ったと懐かしく思います。そんなこんなではあったものの、今日までに、色々と多岐にわたる事業を展開させて頂きました。感謝申し上げます。又、この飛騨高山が発祥となり、全国に10ヶ所のまちスプを設立する事が出来ました。これが最もまちスプ飛騨高山の大いなる実績だと思います。

2020年、年初より、コロナ禍の影響により、活動も大幅に制限されてきました。その中にあって、気づかされたのはやはりコミュニケーションが人々の暮らしの中で如何に大切かを再認識させられました。そして、色々な社会の課題も浮き彫りになったと思います。

私達、まちスプ飛騨高山は今ではこの地区の無くてはならない存在になりつつあります。これから先も地域の人々と協働し合い、より良い街づくりに貢献して行こうと考えております。どうかよろしくお付き合いの程、お願い申し上げます。



すみれ会主宰
立山黒部ジオパークガイド

おおの ひろみ
大野 博美さん

自然への思いを次世代へ

昨年度は「とやま市元気プログラム」の講師として活躍。今年度は自ら主宰するすみれ会の企画として「とやま散歩」を開催し、富山城や松川、いたち川周辺を案内しました。そんな大野さんに活動のきっかけなどについてうかがいました。

活動のきっかけ

「みなさん、この桜の葉っぱの色、見えますか」。昨年秋の「とやま散歩」。季節が移ろう松川べりを歩きながらわかりやすくあたたかい語りでオンライン上の参加者にも声をかけていた大野さん。富山県自然解説員（ナチュラリスト）のほか、富山県野鳥観察指導員（バードマスター）、ジオガイド、立山カルテラ解説員、とやまくら守、ガールスカウトリーダー…誌面では紹介しきれないほどさまざまな顔を持っています。平成2年、当時幼稚園教諭として働いていた頃、富山県自然解説員に認定されたのが活動のきっかけに。その後、「とやま環境財団」で20年以上勤務し、「立山黒部ジオパーク協会」の立ち上げにも関わってきました。「私が活動を始めた頃から生涯学習という言葉が叫ばれるようになりました。博物館などが整備され、出かけて学べる場所も増えてきました。いい時代に生きてきたなと思っています」

自然と向き合うこと

大野さんのすべての活動の中核にあるのは「自然界」。すべてが自然につながっています。平成29年からは「すみれ会」を主宰。自然とふれあう機会を増やしてもらいたいと、観察会や探鳥会、森林教室、里山保全などさまざまな活動を行っています。

個人では、富山県内各地のふるさとの自然、立山や称名滝をフィールドにしたガイド、小学生を対象とした立山室堂の案内と年間を通じて活躍。「それを次の代にわたしていく



ご連絡はこちまで

▼まちスポ飛騨高山

〒506-0025 岐阜県高山市天満町1-5-8(フレスコ飛騨高山内)
TEL: 0577-62-8550 FAX: 0577-62-8580
E-mail: info@machispo.org HP: http://machispo.org

▼まちスポとやま

〒930-0083 富山県富山市総曲輪4丁目4-3(総曲輪レガートスクエア内)
TEL: 076-461-3332 FAX: 076-461-3359
E-mail: toyama@machispo.org HP: http://machispo.org

官民連携事業 まちなかサロンの冬休み

まちスポとやま

門松を作ろう

開催日: 2021年12月25日(土)

①10:00~12:00、②13:00~15:00

参加者: 16組(小学生・幼児23名、保護者18名)

協力:NPO法人Bamboo saves the earth



みんなで

書き初めしよう

開催日: 2022年1月6日(木)

①10:00~12:00、②13:00~15:00

参加者: 22組(小学生26名、保護者21名)

協力: 高瀬繩子先生・土肥栄扇先生

富山中部高校



富山市内在住の書道師範や書道を学ぶ高校生がボランティア講師として指導を担当。書き初めに取り組む小学生に「太く書くこと。名前も大事」と話し、アドバイスしていました。保護者からは「家とは違うのびのびとした環境で思う存分練習ができ、とても助かる」という声があったほか、「学校や家庭とも違う環境の中でやる気が出て頑張れた」とテレビのインタビューに答えていた小学生も。まだコロナ禍で家族や同じ学校に通う仲間としか交流できない日々の中、刺激を受けながら作品を仕上げていたようでした。

